

(131.4×96.4)

新収蔵品紹介

「進貢船の図」

川瀬徳二郎氏寄贈

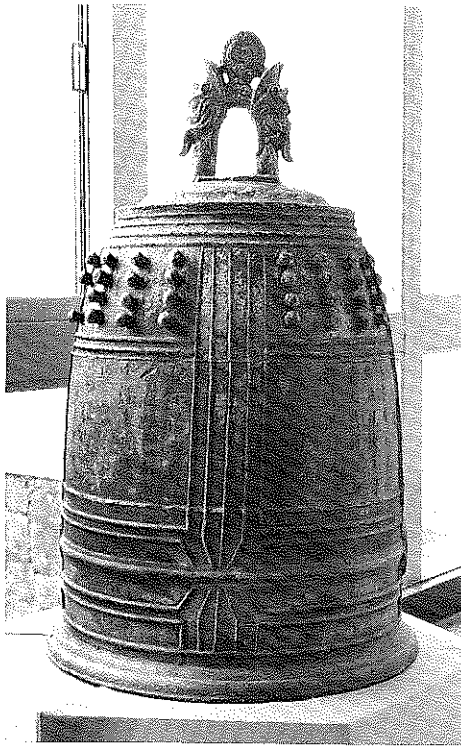
川瀬家に、家宝として大事に引き継がれてきた「進貢船の図」が、このたび県立博物館に寄贈されることになった。

寄贈の「進貢船の図」は、琉球王府から島津公へ献上され、それが何らかの経緯で川瀬家に渡っ

たものと思われる。保存状態はよくないが、色は鮮明にのこっており、修理すればかなりよくなる作品である。この作品の寄贈のはこびは、県出身の見里朝規氏（東京在）の仲介によるものである。

アメリカより里帰り

「永福寺の鐘」



当館1階ロビーの奥、歴史展示室の前に気品漂う小振りの梵鐘が展示されている。

この梵鐘は、今から532年前尚泰久王の時に鑄造されたもので、沖縄戦の最中米軍人の手で米国へもち出されていたのが、この程40数年ぶりに里帰りしたものである。

15世紀といえば、琉球国が舟を操り中国、日本朝鮮をはじめ、シャム、ジャワ、スマトラ、安南などの諸外国と盛んに交易し、大航海時代をむかえた時代であった。

その頃の琉球王国では、中継貿易の富を基礎に国家財政は潤い、数多くの仏教寺院が創建され同時に梵鐘も鑄造された。尚泰久王の1456年から59年の僅か4年間に23口もの梵鐘が鑄造された。この永福寺の梵鐘もその一つであった。

鐘の池の間に刻まれた銘文から景泰8年(1457)年4月13日国家の安寧と人民の幸福を願望した尚泰久王が相国寺の僧・安潜に銘文を書かせ、永福

寺に寄進するために、藤原国義に鑄造させたことがわかる。

永福寺は、尚泰久王代(1454~1460年)に建立された寺院であったが、18世紀初頭にはすでに廃寺となっており、現在その位置さえ不明である。

銘文は、池の間に4区にわけて刻まれている。

(読み下し)

琉球国王

大世の主、庚寅に慶生し、茲に法王身を現じ大茲の願海を量りて

新たに洪鐘を鑄て、以て本州永福寺に寄捨す。上は万歳の宝位を祝し、下は三界の群生を済う。命を辱け、相国の安潜、その銘を為る。

銘に曰く。

華鐘を鑄就し珠林に掛着すれば、

昏夢を鐘破して天心正誠ならしめ、

君心道合し、蛮夷侵さず。

鳧氏の徳を顕わし、追蠡を起わして吟せば、

万古に、皇澤は妙法の音を漂う。

景泰八年 歳次

丁丑四月十三日

奉行 知賢

巴那城

大工 藤原国義

住山比丘 三省



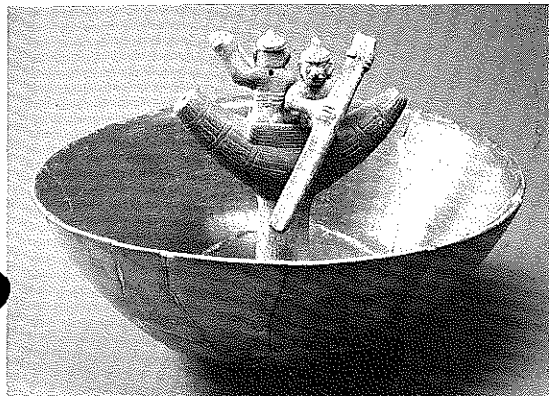
銘(部分)

特別展のおしらせ

「大アンデス文明展」 ～よみがえる太陽の帝国インカ～

会 期：平成2年1月23日(火)～2月24日(土)

〔会期中、休まず開館いたします〕



あし舟をこぐ (浅鉢)

砂漠、高原、熱帯降雨林。さまざまな自然環境に恵まれた南アメリカ中央アンデス地帯は、古くから幾多の古代文明の興亡が繰り返された。その古代文明の中で最もよく知られているのが「インカ帝国」である。15世紀半ばから16世紀半ばにかけてペルーを中心に、北はエクアドルから南はチリ中部にいたる延長約4,000kmに及ぶ高原や海岸地帯を支配した大帝国内である。

1532年、インカ帝国はスペイン人によって征服され、原住民国家は崩壊する。しかし高地に住むインカの末裔たちは、今なお日常生活や儀礼など多くの面で過去の伝統を保持している。

今回の特別展は、インカ以前のチャビン、ナスカ、モチェ、ワリ、チムー、チャンカイ時代などを含む数千年のアンデス文明の全容を紹介する。展示品は、最新の学術研究の成果を踏まえ、発掘された数々の古代アンデスの遺品ばかりでなく、現在なお使われている民族資料を含めて、アンデスにおける農耕、染織その他の技術、宗教、儀礼などが体系的に展示される。展示品の多くは国外に持ち出されたことのないものであり、アンデス文明全容が一堂に展示されるのは世界でも初めてだと言われている。

この特別展は、当館にとって、1980年11月の大恐龍展以来の大展示会である。小学・中学・高校・



金のジャガー頭

大学生にとって、教科書等で学んだインカ帝国の実体を見る絶好の機会であり、また、南米への移民が多い本県にとって、南米ペルーを理解するのにまたとない展示会である。

また、関連の催し物として特別講演会を2回予定している。(P.4の文化講座の項参照)

■主な展示品

- ミイラ (母と子のミイラ、ミイラ包みなど)
 - 黄金製品 (黄金マスク、黄金ジャガー頭飾など)
 - 土器 (ワリの彩色土器、インカの大型尖底土器)
 - 織物、刺繍 (2,000年前の刺繍、インカ染織)
 - 装身具 (耳飾り、首飾り、腕飾り)
 - 楽器 (太鼓、たて笛、ハーブなど)
 - 農具、漁具 (ふみすき、掘り棒、漁網、釣針)
 - 呪術・儀礼具 (石製動物像、木製神像など)
 - 石彫 (ランソン、ライモンディのレプリカ)
 - 模型 (アンデスの地形)
 - 写真パネル (マチュピチュ遺跡、ペルーの自然)
- 総点数 約700点

■入館料

小・中学生	300円
高校・大学生	400円
大人	500円

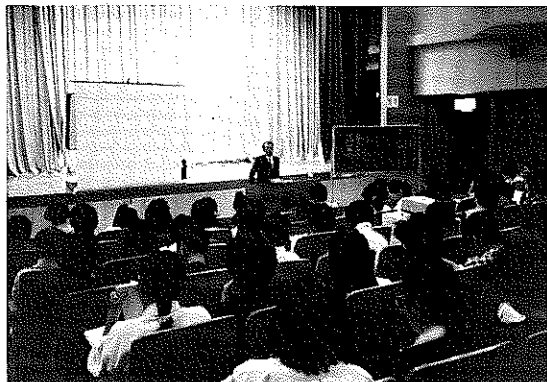
(団体20名以上と前売券は100円引き)

文化講座

博物館文化講座は、昭和46年度からはじまり今年度で18年目を迎えた。

平成元年度は13回予定しているが、そのうちに特別講演会が3件あり、例年になく充実した内容になっている。

上半期の講座は、9回開催した。第175回の「考古学から見た宮古・八重山の歴史」をかわきりに第176回「蔡温とその時代」、第177回「ラン科植物の花のしくみと進化について」、第178回「琉球漆器・螺細をめぐって」、第179回「沖縄の古窯」、第180回「親子民具教室」が行われた。第181回は「冊封使と琉球」と題した講座が開かれた。これは、前年度に調査が実施され、その結果を生涯教育普及書『冊封使—中国皇帝の使者—』として刊行されたが、それをもとに講座が行われた。



特別講演「インドネシアの更紗」講演風景

第182回は「ニシキヘビの増殖と利用」、第183回は特別展「インドネシアの更紗」の関連した講座「インドネシアの更紗」を開催し、講堂が満員となり、立見が出るほど好評であった。

下半期の文化講座は、184回から187回まで、4回予定している。このうち、「大アンデス文明展に関する特別講演会」が2件含まれている。

■特別講演会

●第185回

「古代アンデス文明—インカ帝国の滅亡まで—」南米ペルーを中心とするアンデスの文化をスライドを使ってわかりやすく解説する。

講師：増田義郎先生（東京大学名誉教授）

日時：平成2年1月27日(土)午後2時半～4時半

会場：首里公民館

●第186回の「南米ペルーと沖縄」

沖縄県は戦前より海外への移民は盛んで、南米にも多くの県民が渡った。この講演会では、ペルーに移民した人たちを中心にスライドを使ってわかりやすく解説する。

講師：石川友紀先生（琉球大学教授）

日時：平成2年2月3日(土)午後2時半～4時半

会場：首里公民館

※なお、特別講演会の入場料及び資料代は無料です。

■文化講座

●第184回「沖縄の戦後芸能史」

現在、沖縄芸能は盛んに行われてる。この芸能界の戦後の歩みを解説する。

日時：12月16日(土)午後2時半～4時半

講師：大城学（当館・学芸員）

定員：なし

●第187回「琉球の書」

琉球の書は漢文や仮名文のなかで発達してきた。いくつかの作品をとりあげて琉球の書の流れを美術史のなかで解説する。

日時：3月10日(土)午後2時半～4時半

講師：屋部憲次郎（書家）

定員：なし

特別展「インドネシアの更紗」盛況のうちに終わる

古来より沖縄は中国や東南アジア諸国と交流し、様々な文物を取り入れ、それを沖縄の気候風土に合わせて改良工夫してきた。なかでも、染織品は色々な面で影響を強く受けてきたと言われている。

今回その東南アジアの中でもインドネシアの代表的な染織品である更紗を紹介する機会を得た。

展示会は、1989年11月1日～26日の期間に開催された。紹介されたインドネシアの更紗は、ジャワをはじめとした各島々で製作されたもので、膨大なインドネシア染織のコレクションである岡田コレクションの中から精選されたものである。なかでもケレックの更紗は初公開であった。

展示会場が狭く、202点の資料を一度に展示することができないため、途中で、この展示会の監修者である国立民族学博物館の吉本忍氏の指導の元で、大きく展示を替えた。

関連する催し物として、第183回、文化講座「イ

ンドネシアの更紗」が行われ、200人余の参加者があった。講師に展示監修の吉本忍氏を迎え、スライドを使いながら講演が行われた。また展示会における入館者は予想をはるかに越え、2万1千人がインドネシアの更紗を観覧した。



企画展「真境名由康生誕100年記念 芸能資料展」

沖縄の近代芸能史は、真境名由康を抜きにしては語れない。その師が生まれたのは、ちょうど今から100年前の1889年10月である。この企画展は、真境名師の生誕100年を記念して平成元年12月1日～24日までの会期で開催した。

真境名師（1889～1982）は、7歳のとき組踊の子役として初舞台を踏み、以来生涯を沖縄芸能と

ともに歩んできた。師の芸は組踊や伝統舞踊などの古典をまもり、それを基に新たな歌劇やセリフ劇、舞踊を創作し、数多くの作品を残している。今回の展示は真境名師の歩んだ芸能の道を通して沖縄の近代芸能史を紹介するものである。

展示は真境名師が使用した舞踊に関する道具類を展示した。特に「二童敵討」に使用した衣裳を着用した状態で展示し、その周辺には刀や入道頭巾、瓶子を置き、壁には真境名師が考案した七つの型を写真で表示した。また、真境名師と交友のあった火野葦平や川端康成、棟方志功よりの葉書なども展示した。

展示会場には琉球古典音楽が流れ、観覧者は古典音楽ともに真境名由康師の芸道を堪能していた。

関連の催し物として12月9日に当館講堂にて記念講演が行われ、約70名の参加者があった。講師に作家の大城立裕氏と同事業会会長の崎間麗進氏を迎え、それぞれ「ハンドゥー小の世界」と「由康先生の人と芸」と題した講演が行われた。



中間報告

普及書「沖縄の祭」

この普及書は、生涯教育推進事業の一環として実地している「沖縄の祭り」の成果である。

県内各地には、古くから行われてきた祭りが伝承され、現在も盛んに行われている。しかし、県内の祭りに関する資料は、十分に整理されているとはいえない。特に、いつ、どこで、どのような内容の祭りが行われているのか、といった基礎的な資料は十分に把握されていない。

そういった状況にかんがみ、市町村教育委員会や公民館等の協力を得て、県内の祭りの現状を調査、整理する。祭りをとおして沖縄文化史を学習することができる効果的な普及図書を作成し、配布することによって、生涯教育の推進を図りたい。

内容は「私たちの暮らしと祭り」「古文獻にあらわれた祭り」等を予定している。



石垣市四箇の豊年祭

県立博物館友の会10周年を迎える

沖縄県立博物館友の会の設立準備会がもたれたのは、1979年の暮れであった。翌1980年1月9日には、準備会2回目の会合がもたれ、そこで会則の承認と大城精徳会長以下役員、評議員が選出され、沖縄県立博物館友の会が誕生した。以来、来年の1990年1月には、満10歳の誕生日を迎える。

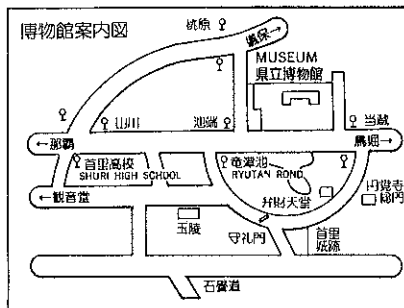
「博物館の事業に積極的に参加協力し、合わせて、会員相互の教養を高め、親睦をはかることを目的とする（沖縄県立博物館友の会会則第2条）」との趣旨で発足した友の会も、発足当初30名にも満たなかった会員が今日では230余名を突破し、10周年を迎えるのに相応しい発展ぶりである。

友の会では、会の誕生以来博物館が実施する事業へのボランティア活動及び図書、備品などの援助活動をはじめとして講演会、映写会、研究会、研修旅行、野外見学のほか、会報『赤い瓦』、機関

誌『博友』、その他沖縄県立博物館発行出版物の復刻刊行などの数々の事業を行ってきた。

また、発足当初から博物館ロビー内の売店を借用して専従事務職員を配置し、友の会の刊行する出版物、絵はがき等の販売事業活動も行っている。現在では、その売店を拠点として会の活動が行われている。

5月に行われた今年度の総会で10周年記念事業の開催が決議されたのを受け、記念事業実行委員会がつくられた。検討の結果、来年1月5日から13日までの9日間の日程で「わたしのコレクション展」を開くことになった。その趣旨は、会員所蔵する「コレクション」を持ち寄り、展示・公開することによって会員相互の親睦を図り、あわせて会員所蔵の「コレクション」を広く県民に紹介するものである。御期待下さい。



〈バス路線〉

- 那覇交通(銀バス) ●(1)石嶺線(南南) ●(13)牧志線(首里) ●(12)米吉線の「池端」又は「当城」停留所下車、徒歩2分 ●(2)石川線(首里経由) ●(4)西原線(山川経由)「桃源」停留所下車、徒歩5分。

沖縄県立博物館だより No.29

発行年月日 平成元年12月26日
 編集・発行 沖縄県立博物館
 住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1
 Tel 0988-86-4353
 84-2243